

## 附属学校における保健室の役割と効果および課題について

研究代表者：和歌山大学教育学部 本山 貢

共同研究者：和歌山大学教育学部附属小学校 森本孝子（養護教諭）

附属中学校 花野真弓（養護教諭）

附属特別支援学校 鶴岡尚子（養護教諭）

和歌山県立みはま支援学校 藤川由紀子（養護教諭）

岬町立深日小学校 松本勝治，長根わかば，岡田良平，河村愛美（養護教諭）

岬町教育委員会 保田智子

### 1. はじめに

平成から令和へ時代の流れとともに、ネット社会・高速化時代・性の多様化等、社会環境や生活環境が日々目まぐるしく変化している。それに伴い、子どもの生活習慣に影響が生じたり、様々な心身の健康問題が表面化したりしてきている。こうした現状の中、教諭が子どもの日常生活全般において、健康で安全な生活を過ごせるように支援することが重要であり、そのためには養護教諭との連携が必須である。効果的な連携のためには、教員養成を担う大学教育において、学生が事前に養護教諭の業務内容や保健室の役割をはじめ、学校保健教育について理解しておくことが重要となる。

和歌山大学附属養護教諭研究グループは、平成 25 年度から和歌山大学教育学部の 2・3 年生を対象とした「初等体育科教育法」の 90 分授業において、「和歌山大学附属学校における保健室の役割と効果および課題について」というテーマ・内容で附属学校養護教諭 3 名が、養護教諭の業務内容及び学校保健に関する連携授業を 7 月に行っている。授業後にアンケート調査を行い、学生の理解度と今後の授業で期待する内容についてまとめた。



### 2. 連携授業の取り組み報告

#### （1）講話内容

授業で行った内容について項目は以下の通りである。

#### ●小学校・中学校 「保健室の現状と養護教諭の役割」

- |                 |            |           |                |
|-----------------|------------|-----------|----------------|
| ① 保健室の役割        | ② 「養護」とは   | ③ 養護教諭の職務 | ④ 子どもの現代的な健康課題 |
| ⑤ 健康課題の解決に向けて   | ⑥ 学校保健の活用  | ⑦ 健康観察    |                |
| ⑧ あれっ？と感じる子どもの姿 | ⑨ 学校での救急処置 | ⑩ 食物アレルギー |                |

⑪ 保健室・養護教諭との連携

⑫ 子どもたちに輝く笑顔を！！

●特別支援学校

- ① 特別支援学校の児童・生徒の実態      ② 保健管理の色々な方法
- ③ 健康診断の場面における困難      ④ 障害特性に応じた保健指導の例
- ⑤ 障害のある子どもへの性に関する指導

(2) アンケートの記述より

質問項目と、記述内容を大まかにまとめると以下の通りである。

- ①【学校保健教育を進めるにあたり、学級担任や教科担任として、養護教諭とどのような関わりをもっていきたいと思いますか？】
  - ・子どもの健康状態を把握するために養護教諭と積極的に情報交換していきたい。
  - ・問題や課題は自分一人で解決しようとせずに養護教諭に相談し、学校全体で対応していけるように、校内のコミュニケーションをとっていきたい。
  - ・担任と養護教諭を別々のものとして考えるのではなく、子供たちの健康を第一に考える存在として、情報共有をしたい。
  - ・子どもの変化、いつもと違う様子に気付いていきたい。そのためにも養護教諭に任せるのではなく、保健室で見える子供の姿を共有していきたい。
  - ・処置に関して担任が指示を出さないようにしたい。
- ②【保健室の役割や養護教諭の職務について、また、学校保健教育に関して他に知りたいことがあれば教えてください。】
  - ・保健室登校の生徒とどんな関わりをしているのか。
  - ・心のケアで気をつけることは何か。
  - ・来室者がいない時、どんな仕事をしているのか。
  - ・連携する具体的な外部機関はどこか。
  - ・応急処置の方法、アレルギーについて。
  - ・ケガや病気じゃなくても保健室に行ってもいいのか。
  - ・養護教諭不在時のケガや病気の対応はどうするのか知りたい。
  - ・性についてどこまで、どのように教えたらいいのか。(LGBT の生徒が来た時の対応を含む)
- ③【今日の授業で分かったことや感想をお聞かせください。】
  - ・自分（担任）も健康管理に関わるのだと分かった。
  - ・ケガや病気は保健室に任せるものだと思っていたが第一発見者(多くは担任)が処置を行う必要があることが分かった。
  - ・保健室について考えたことがなかったので、今回初めて業務の多様さを知った。
  - ・保健室も「チーム学校」の一員であることが分かった。
  - ・チーム学校として機能することが、健康課題の早期発見・早期対応のネットワークづくりに

なる。

担任として、その一員である自覚をもって臨みたい。

- ・養護教諭との情報共有や連携を密にとっていくことが大事だと分かった。そのために、養護教諭とのコミュニケーションをきちんとしていきたい。
- ・健康観察が大事であり、知ろうとする・理解しようとする姿勢ももち合わせていきたい。
- ・「あれ？」普段の様子との違いに気付くことの大切さや、先入観をもたない意義が分かった。
- ・子どもたちの健康課題は、身体という表面的なものだけでなく、その内側にも存在していることを再認識できた。
- ・保健室という場所は、学校の中で少し違った空間であると感じた。一教員として養護教諭と連携していくことで、子どもにとって安心できる空間を広げたいと思った。
- ・自分で体調の悪さを伝えられない子もいることが分かった。
- ・スクールボランティアで、今回学んだことを活かしたい。

以上のように、この授業で多くの学生が、自身の子ども時代の保健室や養護教諭との関わりを想起しながら、養護教諭の講話を聴いていた。そして学校現場の実情や健康課題などを知り、教育実習や教職に就いたときに、学校保健をどう捉え、どう関与していくべきか考える足掛かりとなったと推察される。

アンケートの記述からは、学生がこれまで出会った養護教諭をもとに作り上げてきた養護教諭像や保健室のイメージ、また、担任や養護教諭から受けてきた指導や関りにより作られてきたイメージが個々によって様々であることが読み取れる。中には、養護教諭の立場からみると、そのイメージが現実離れしていると感じられる部分もある。本来、保健室や養護教諭の役割はその時代、地域性等、様々な条件によって変化するものである。教師が、自分の経験に依る価値観だけに基づいて子どもたちに接することは危険だといえる。なぜなら、学校保健に関する担任の無理解や浅学によって傷ついた子どもたちと接してきた経験が、養護教諭には多少なりともあるからである。そういった、教師間の意識の違いによって傷つく子どもたちがいなくなるよう、保健室や養護教諭がどうあるべきなのか養護教諭自身が自覚し、それを学生に伝えることが求められる。そして学生に対しては、担任とは違った視点で子どもたちを見ることが出来る保健室という場所、養護教諭という人材がいることを認識し、重要な校内資源として担任の立場から活用し、連携していくことができるような教師になって欲しいと願う。この連携授業が、その第一歩となることを期待する。

### 3. まとめ

今回、アンケートの中で学生から寄せられた疑問や質問に対して、附属3校の養護教諭が答えられる場を設定できないかと方法を模索した。しかし、前期で終了する授業であったため、同じ学生が集まる場がなく、そのような機会は確保できなかった。学生たちが講義内容以外でさらに知りたい事は、【保健室登校の対応、心のケア】、【応急処置、アレルギー対応】、【性教育について（LGBTを含む）】に大別できる。次年度は、それらへの回答をまとめたプリントを配付またはメール送信する、同じ学生が受講する授業の中で再度時間をいただき、有志が参加するワークショップを大学で開催する等、学生の疑問や質問に答える方法を実現させたいと考えている。

現在、教育実習期間中に、附属小・中学校で学校保健に関する短時間講和、及び小学校での休憩時間の保健室見学に取り組んでいる。実習後の学校保健に関するアンケートから、実際に子どもを目の前にして、健康観察や保健室での問診・視診・応急処置等の対応に触れることで、学校保健に関する意識の高まりがあったと推察される。一部の学生が対象ではあるが、初等体育科教育法での学校保健に関する連携授業と、教育実習期間中の講和や保健室見学をフィードバックさせていくことも、一つの重要な方策であると実感している。

また、附属3校の養護教諭にとっても、この連携授業は意義深いものとなっている。同じ養護教諭という職種でも、校種が違えば大事にしている事や求められる専門性が異なるため、互いに学び合う機会となっている。そして今年度は、県内唯一の病弱児を対象とした支援学校である、みはま支援学校が一般公募により連携メンバーに加わって下さった。具体的に共に活動できるような場は設定できなかったが、病弱児への細心の注意や配慮を要する日頃の対応から、他校の養護教諭が学ぶべきことが多々あると考える。次年度は、校種の異なる養護教諭が学び合えるような場も設定していきたい。

最後に、学生が教育実習や教職に就いた時に、即必要となる学校保健教育に関する知識を予めもっておくことは、子どもたちの命を預かっている学校現場では必要不可欠なことである。その対策として、附属学校養護教諭との連携授業や、教育実習中の学校保健に関する講話及び保健室見学等の取り組みは効果的であった。これらを通して、多くの学生が学校保健を理解し、積極的に参画していく必要性を意識できたと推察され、大変有意義であった。このことより、連携授業「和歌山大学附属校における保健室の役割と効果および課題について」の重要性が確認できた。

今後も学校保健に関する様々な課題解決に向けて、大学と附属学校養護教諭との連携を強化していきたい。